

## 中島敦「かめれおん日記」論

— へ一身両口 現象および道家思想の投影 —

孫 樹 林

中島敦は、「かめれおん日記」において『韓非子』の「蟲有虺者。一身兩口、爭相齧也。遂相食、因自殺。」をエピグラムとしてつけ、文中では次のように記している。

身體を二つに切斷されると、直ぐに、切られた各々の部分が互ひに鬭争を始める蟲があるさうだが、自分もそんな虫になつたやうな氣がする。といふよりも、未だ切られない中から、身體中が幾つにも分れて争ひを始めるのだ。外に向かつていく對象が無い時には、我と自らを噛み、さいなむより、仕方がないのだ。

中島敦の文学において、常に一事物の中に相對する二つの性向が存在するように思える。この性向は、「かめれおん日記」において、この（一身両口）という言葉をもつて具体化されている。一般に、「かめれおん日記」におけるこの（一身両口）の意識は、中島敦の精神内

部の葛藤を描いている「自己觀察、自己分析」であり、「第一の我と第二の我との、激烈な鬭争・角逐」と思われている。しかし、次の引用で明らかのように、「我」に相對するものは單一のものではないし、必ずしも同次元のものではないので、それらをことごとく「第二の自我」には同一化し難い。

俺といふものは、俺が考へてゐる程、俺ではない。俺の代りに習慣や環境やが行動してゐるのだ。之に、遺傳とか、人類といふ生物の一般的習性とかいふことを考へると、俺といふ特殊なものではなくつて了ひそうだ。

俺といふものは、俺を組立てゝゐる物質的な要素（諸道具立）と、それをあやつるあるものとで出來上つてゐる器械人形のやうに考へられて仕方がない。この間、欠伸をしかけて、ふと、この動作も、俺のあやつり手の操作のやうに感じ、ギョツとして伸ばしかけた手を下した。（中略）私といふ個人を形成してゐる・私の胃、私の腸、私の肺（いはゞ、個性をもつた其等の器關）を、はつきりと其の色、潤ひ、觸感を以て、その働いてゐる

る姿のまゝに考へて見た。(中略)すると、私といふ人間の肉體を組立ててゐる各部分に注意が行き互るにつれ、次第に、私といふ人間の所在が判らなくなつて來た。俺は一體何處にある？

このように、「かめれおん日記」において独立した個体として存在しているのは「第一の我と第二の我」といった單純な構成ではなく、複数のものが多様な形式で存在し、それらは多重構造を成している。すなわち、ここで、「習慣」や「俺を組立てゝゐる物質的な要素(諸道具立)」や「あやつり手」などはいずれも生命や意思を持つてゐるものとなつており、各々の独立した個体として「俺」と相對しつゝ存在しているのである。

一つのボディーに複数の生命が群居するこの(一身両口)という意識と描出は、中島敦文学の特殊性の一つと言つてもよい。思想的視点から考えれば、こういったユニークな表現は、西洋思想や近代文学と言ふより、中島敦の家学である漢学による一つの投影と考えられる。いわば、反西洋的、反近代的なものをもつようである。それでは、こういった反近代的な意識とその描出は、中島敦に影響を深く与えた漢学もしくは中国思想とどのような関係があるのであろうか、そして、それは何を意味するのであろうか。

## 二

陰陽と五行は、中国哲学史や思想史に一貫する最も重要な基本概念

である。陰陽説は、古代中国の易学の考え方であり、老子の言う「道生一、一生二、二生三、三生萬物。萬物負陰而抱陽、沖氣以爲和。」(『老子』(四十二章))の中の、「萬物負陰而抱陽」の「陰」「陽」なのである。

老子の論は、宇宙の誕生する過程や宇宙万物の形成原理及びその存在形態を論じたものと思われ、老子の言う「一」とは「道」が生んだものであり、そこからさらに「二」が生まれてくる。つまり、「道」によつて生れた「一」があつてから「陰」と「陽」という相對するものが誕生、あるいは分化するといふのである。そして、「陽」は、天、日、昼、雄、表、強など、「陰」は、地、月、夜、雌、裏、弱などという相對的な具象に演繹できるので、いわば、陰陽とは、世界万物を兩分する、抽象の総合的概念なのである。

五行「金・木・水・火・土」という概念は、『尚書』において始めて言及された<sup>(4)</sup>といふ。この五つのもは、宇宙、天地、人世の万物を構成する基本元素と思われ、それらは複雑な相互運動によつて万物を生み出すのであり、逆に言えば世界万物のいずれの中にもこの五元素が存在しているのである。これらの五元素の間には、また「相生」、「相克」の原理がある。五元素の性質とその相応関係により、鄒衍は、その関係を「順行」と「逆行」とに分ける。「五行」といふ言ひ方はこれに因んでゐる。「順行」とは、「木生火、火生土、土生金、金生水、水生木」といふもので、「相生」とも言ひ、「逆行」とは、「金克木、木克土、土克金、金克水、水克火、火克金」といふもので、「相克」とも言ひ。

五行説は、また医学においてその属性も発見、活用され、医学者

は、五行説をもつて人体を説明するようになる。つまり、「五行」に對し「肝、心、脾、肺、腎」の「五臟」という概念が創り出され、「五臟」もそれぞれ「五行」にかかりつつ説明されるのである。例えば、肝Ⅱ木、心Ⅱ火、脾Ⅱ土、肺Ⅱ金、腎Ⅱ水である。この対応における内在的な関連性は、例えば、「肝Ⅱ木」について、「木」は、自然に芽生えて自身を調整、調達することができるものであるが、肝臓も、人体の全機能を調達し順調させるといふ属性を持っているものなので、肝臓は「木」とされたのである。また、「木生火」といふ属性を医学上に応用すれば、「木」なる肝臓は、「火」といふ心臓を養う性能があるので、肝臓をよく養えば心臓も自ずと健康になるといふことである。中国では、古来「三魂七魄」や「六神無主」などのような言い方があつたが、これらはいずれも人体に居る「魂」を指し、八千冊以上にも及んだ中国漢方医学の専門書には、随所見られる。たとえば、『雲笈七籤』によれば「横になる時、頭の傍に暖炉を置いてはいけない。なぜなら、そうすれば六神を不安にさせてしまふからである。」と記す。ここでの「六神」とは「心」、「肺」、「肝」、「脾」、「胆」の六臟を主宰する神のことを指すのである。

『老子』第六章には、「谷神不死、是謂玄牡。玄牡之門、是謂天地根。」という難解な記述がある。「河上公注」の解説によれば、「谷神」の「谷」とは「養う」ことであり、すなわち「神を養えば死なないのだ」とされる。ここでの「神」とは「五臟の神」であり、つまり「肝」、「肺」、「心」、「腎」、「脾」にそれぞれ「魂」、「魄」、「神」、「精」、「志」といふ主宰者の神（魂）が司るわけである。

中島敦の文学には、こういった中国思想、とりわけ道教の影響があるようである。それでは、こういった道教の独特な人体観は、中島敦に如何なる影響を与え、それらが如何に文学化されているのであろうか。

「かめれおん日記」では、主人公は自分が虻となつたような気がして「身體中が幾つにも分れて」争つたり、「我と自らを噛み、さいな」んだりすると、自分自身に起こっている「多生命の共存」といふ異常現象を提起し、点検する。主人公は、そのことについて「私が大脳の生理に詳しくないから、又、自意識に就いての考察を知らないから、こんな幼稚な疑問が出て来た譯ではなからう。もつとはるかに肉體的な（全身的な）疑惑なのだ。」と分析した上に、「俺といふものは、俺を組み立てゝゐる物質的な要素、（諸道具立）と、それをあやつるあるものとで出来上つてゐる器械人形」であるという判断を下しているのである。

中島敦が記している諸現象の中で、最も注意すべきものは、「俺を組み立てゝゐる物質的な要素（諸道具立）」を「あやつるあるもの」といふ描出である。この「あやつるあるもの」は、物質的な要素の全体をあやつる単一なものとも読み取れるが、しかし「私といふ個人を形成してゐる・私の胃、私の腸、私の肺（いはゞ、個性をもつた其等の器關）」などが存在しているため、「各々の部分が互いに闘争」するということからすれば、中島敦が言う「あやつるあるもの」とは単一なるものというより、複数のものを指すに違いない。しかも、これらの「あやつるあるもの」は、統治者として肉体に君臨している以上、

当然ながら被統治者である肉体に相對する精神を持つものであり、それと同時に、その肉体より高い次元に居るものである。すなわち、まさに「あやづり手」が各々の「物質的な要素」に君臨しているからこそ、「胃」「腸」「肺」などは無生命の物質ではなくなりそれぞれ魂を持った生き物となってきたのである。「私といふ人間の所在が判らなくなつて來た」のも、まさに「私といふ人間の肉體を組立ててゐる各部分」が自分から独立しつゝ互いに闘争しあうからなのである。

「かめれおん日記」に現れている中島敦の人体觀をまとめれば、人間とは、複雑・複數のものより構成され、体中にそれぞれ意識を持つ多數の生命が共存しつゝ不調和により争いあうというものであり、そして、複數の生命が群居する棲家としての人間は、それ故、人間より高い次元に居る「あるもの」に支配されるのである。

言うまでもなく、「かめれおん日記」におけるこれらの思想と表出、特に臟腑器官をそれぞれ命のあるものとして取り扱うことは、中島敦の熟知する「陰陽」「五行」と妙な相似形をもっているものであり、道教を以ては他の文化や思想には見られないものようである。こういった思想とその描出は、中島敦が道家思想から影響を受けた実例の一つでもあり、中島敦なりの「陰陽」「五行」觀の一つの閃きでもあると言つてよいであろう。

中島敦が、近代科学で承認されにくいこういった（一身両口）現象を文学に描いたのは、文学を営むための装身具でもなければ、作者の知的な誇張でもない。宗教的な傾向がなかった中島敦が、この汎神論的な問題を文学に提出したのは、彼の実体験したことによるもの

外に、彼の教養の基底にある東洋文化の汎神論的な思想が自ずと噴出したものと考えられる。そして、こういった思想と追求は、それまでの「斗南先生」、「狼疾記」、「かめれおん日記」三作で終焉せず、その後、「山月記」、「文字禍」、「狐憑」、「木乃伊」、「盈虚」、「牛人」などに広がり、さまざまなバリエーションを展開させていったのである。

### 三

前記のように、「かめれおん日記」の主人公「俺」は、生命を持つ独立体として多くのものとも共存しているため、つねに「どれだけ自分のほんものがあるか」と不安を持ち、混沌たる共同体の中における〈自我〉と〈超自我〉との分別やその関係などについて確認しつゝ、〈自我〉の発見とその回復に努めようとしたのである。

現時点で公開されている中島敦の関係資料に即すれば、「莊子や列子の羽を少し。（中略）何といふ醜怪な鳥だ。」（「かめれおん日記」）という類のものを除いては、中島敦が『列子』について直接言及したことはないようである。しかし、中島敦は、「かめれおん日記」を執筆していた頃、『列子』などを耽読していたことも明らかであるし、中島敦文学と『列子』との関係についての先行研究で指摘されているように、中島敦が『列子』から多大な影響を受け、そしてそれを多次元に活用していたことも確実である。したがって、「かめれおん日記」創作の際、中島敦が耽読していた『列子』は、この作品に何らかの形でその影響を与えているに違いないと考えられる。次では、それに

いて少し考察してみる。

この『列子』には、人間の生存形態に関する論述がある。

人自生自終、大化有四。嬰孩也、少壯也、老耄也、死亡也。

其在嬰孩、氣專志一、和之至也。物不喪焉、德莫加焉。其在少壯、則氣血飄溢、欲慮充起。物所攻焉、德故衰焉。〔『列子』(天瑞篇)〕

『列子』は、人生を「嬰孩」、「少壯」、「老耄」、「死亡」の四つの段階に分ける。「嬰孩」の時は、心神と意志とが純一で、心身が調和的な天人合一の状態にあるゆえ、外的なものから害されることが少ないし、天性である「徳」のもっとも高い時期である。それが、「少壯」つまり成年期に至ると、「氣血」が溢れ散ったりして、その(先天性)が次第に薄くなる。また、欲望や思慮などが体内に充ちてくるため、異物はそれを通して侵蝕しやすくなるし、徳も衰えてくるということである。

中島敦の成長史から考察すれば、次のようなプロセスが見られる。彼は自分の(先天性)に家学の漢学教養が加味され、それによって、現世における彼の(ほんもの)の性格、つまり彼の東洋思想的な精神構造の基底が作られたが、しかし激変の時代に生きていた彼は、成長するに連れ、西洋の現実尊重的な価値観、物質的な享受、人間の本能的な欲望などの現実的なものがだんだんと芽生え、「少壯」に至って、それらの欲望が頂点に達するのである。現実的な欲望は膨張するが、

肉体は衰微していく一方で、成長期の環境も彼の人生に暗い影を落としていた。つまり、中島敦は中年に差し掛かり、肉体と精神の両面に不調音がし出し、「嘔みあう」状態に陥ったのである。こういった中島敦の人生は「かめれおん日記」において巧妙に浮き彫りにされている。

「かめれおん日記」の主人公「俺」は、『列子』で言う「少壯」に当たっているので、精力や欲望が心身に充ちており、そのため、外物に誘惑、侵害、操られやすくなったりする。ついで、中島敦は、『列子』の「少壯」時の「氣血飄溢、欲慮充起」に対して、「中年」の「我執」や「排他的」をもって対応し、『列子』の言う「人自生自終、大化有四」論を自分流に具体化させているのである。これらは、中島敦が意識して行ったものではないかもしれないが、現象的に言うなら、この「かめれおん日記」には『列子』の人生論を髣髴させるものが確実に潜んでいると言える。

『列子』には、また「神」と「形」の存在と消失に関する記述があるが、これらも中島敦と内なる繋がりがあろうである。

精神者、天之分。骨骼者、地之分。屬天清而散、屬地濁而聚。  
精神離形、各歸其真、故謂之鬼。鬼、歸也、歸其真宅。黃帝曰、  
精神入其門、骨骼反其根、我尚何存。〔『列子』(天瑞篇)〕

その大意は、次の通りである。人間の精神は、天に属するもので、骨格は地に属するものである。天に属するものは清らかで、分散的であり、地に属するものは濁り、集結的である。形を有するものは、最

終に必ず終らねばならない。生きるものは理に応じ必ず終らねばならぬのである。精神は形を持つ体を離れ、各々真に還るゆえに、「鬼」と謂う。「鬼」は「帰」である。真の宅に帰るということである。黄帝曰く、精神が其の門に入り、骨格は其の根に返る。ゆえに、私は尚何処に居るのか。

『列子』〔天瑞篇〕は、主に宇宙万物の本源と人間の現世においてとるべき態度を論じるものであるが、上に引いた箇所は、人間なるものを構成させる二つの相対する要素、つまり精神と肉体の属性について論じた部分である。この論の中で、注目すべき点は、精神は天に属するもので、地上の肉体と一体化する前にすでに「特殊性」を具備しており、地に下りて地のものである肉体との結合によって、人間というものもが誕生、そして、精神と肉体がまたそれぞれに返るべき所に返っていくと、人間というものは死滅する、ということである。

そして、こういった『列子』の精神と身体の分立・統合論が、「かめれおん日記」に影を落としたところがある。

「かめれおん日記」では、次のような描出がある。主人公は、吉田の俗世に執着する話を聞いてから、あまり愉快ではない気持ちになつて、外に出て何気なく東の空を仰いだ、その時、「春以来、半年ぶりでオリオンの昇つてくるのを見つて」、「私は思わず『アア』と聲を出して感動し、また「三つの惑星を見上げながら」、「誕生した日の・瑞祥に充ちた星座の配置が自分の偉大さへの自信」という詩を思い出しつつ「青春への郷愁に胸を焼かれるような思いを」したと述懐する。「狼疾記」などからも裏付けられるように、「青春への郷愁」的な感

動を招いたのは、「自分」が「瑞祥に充ちた星座」と一体化することが大前提となっている。つまり先天的自我をもつ「自分」と「天」の永遠性とが存在しているからこそ、主人公の感傷が成り立つと考えられる。ここでは、天に属し永遠性を持つものとされる「星座」は「列子」の「天之分」としての「精神者」の代物となっており、俗世の地上に居り肉体を持つ自分のことは『列子』の「地之分」としての「骨格者」の代用となるのである。

こういった表出は、中島敦の〈先天的〉自我観の一つの頭れと言つてよいであろう。しかし、ここでの〈先天的〉自我観は、まだ曖昧な段階にあり、それは「狼疾記」に至つてより明確化される。「狼疾記」に、次のような描出がある。

すなわち、三つの生のあり方である。第一、自分は今の人間と違つたさらに高い存在（他の遊星の上に棲むもの、われわれの眼に見えない存在、または時代を異にした・人類の絶滅した後の地球上に出て来るもの）に生まれてくることも可能であった。第二、自分が臨終の時、振り返つてみて感じるであろう、一生の短さへの感じ、大きなものの中における自分の位置を悟らずにあくせくと過ごし、その生について最後の瞬間に始めてはつとするのであると断定する。第三、南米の駱馬は、危険を感じたら太古の氷河時代に先祖がしたようにある安全な場所を目指して助かるうとする。そのように、自分の不安もこうした前代の残存物かもしれないと考える。

言うまでもなく、これらの〈先天的〉な自我観は「かめれおん日記」の論の進化したものであり、より具体化したものである。

これらをまとめてみると、「俺」は只現世で生きているものではない、すなわち現時点の「俺」は、生命の長い連環上の一環にすぎず、今の環境などの外在のものより先に存在し、また次々と各環境（他の遊星や、目に見えないところやまた他の境界など）の中を巡っていく（輪廻）のものである。

「かめれおん日記」において、中島敦は、〈自我〉およびその〈先天性〉についての暗示と追求が「狼疾記」ほど明確に示していない。しかし、「狼疾記」とあわせて考察すれば、その意図は明らかである。中島敦は「かめれおん日記」を通して、天に属しつつ肉体と結合する前の「精神」、すなわち後天的要素を伴わない〈先天性〉の〈自我〉を密かに追っているものであり、そしてこういった思想は『列子』と通底していることは明らかであろう。

中島敦と『列子』との関連性について、もう少し考察してみる。『列子』の「湯問篇」に、扁鵲が魯の公扈と趙の斉嬰にその心を交換させた話がある。

魯の公扈と趙の斉嬰が、それぞれ病気にかかっているので、扁鵲に観てもらって治った。が、扁鵲は、今二人のかかった病気は外的原因によって患わされたもので、薬では治ったが、しかし、二人はまた先天的な病気にもかかっているという。それは、体の発育するに従いますます重くなるに違いない、今その病気を治してあげたらどうだろう、と提案した。二人は、それは何の病気かと聞いた。扁鵲の言うによれば、公扈は志が強いが気質が弱い、ゆえに、謀略に長じるが果断に乏しい。斉嬰は志が弱いが気質が強いため、謀略に乏しいが専断に

なりすぎる。若し、お二人の心をお互いに交換すればそれが治るのだと。それで二人は応諾した。「心」を交換して治った二人がそれぞれ家に帰った。しかし、公扈が斉嬰の家に帰り、斉嬰が公扈の家に帰ったのである。ところが、二人の家人は其れを認めずトラブルが起った。結局、扁鵲が出てその詳細を説明して、その紛糾がおさまったという。

この寓話について、以下の三点に注意すべきだと思う。第一、取り替えられた「心」とは、肉体に相對する概念で、「気質」と「志」を含んでいる「精神」とも言い換えられるものであり、人の世に生れた以前にすでに存在している〈先天的〉なものである。したがって、二人の心的な疾患も生まれつきのもので、恒常性をもつのである。第二、心を交換された二人は、肉体が昔のままであるが、心（精神）が変った。それゆえ、それぞれ自分の家と考える相手（肉体）の家に帰ったのである。第三、心が取り替えられた主人のことを不承認した家族は、これまで人の世における見慣れてきた肉体という外形を他人から区別する唯一の基準にしていたからである。

「かめれおん日記」の「俺」も、公扈と斉嬰と同様に「心」の病に患わされ、心と体との不調和により苦しんでいる。「俺」は、自分が「惨めさ、情けなさ、うじうじ、くすぶり、我と我が身を噛み、いじけ果て」などの病症があると気づき、不安と焦燥とを感じる。また、「こんなはずではなかったのだが、一体、どうして、又、何時頃から、こんな風になつて了つたのだらう？ 兎に角、気が付いた時には、既にこんなヘンなものになつて了つてゐたのだ。」と反省し、さらには、こういった状態になつた原因は、「根本的な・先天的な・ある能力

の欠如によるものらしい」と断定する。

すなわち、「俺」は、「根本的な・先天的な・ある能力の欠如」のため、没功利主義、ものごとに対する単純化、またはすべてのことを、「大きなもの」や「永遠」と対比し考え、その「無意味さ」、「無常」を常に感じるのである。換言すれば、「俺」は自分の〈先天性〉に固執しているため、〈自我〉としての〈心〉は現世における〈肉体〉とズレが生じてきたのである。もちろん、主人公の言う「根本的な・先天的な・ある能力」とは、人間として生の本能というべき能力、つまり現実にこの世に生きる能力を言うのである。

扁鵲は、人間としてあるべき天人合一的な状態に回復させるために魯の公扈と趙の齊嬰の心をお互いに交換させた。「かめれおん日記」における、「俺」も、周りの人間がみな正常に生きているように見え、羨ましく感じ、自分もその一人の吉田のように現実的に生きようと、この男を自分の手本とし、これまでの「心」を取り替えようと試みた。しかし、「ほんもの」の〈自我〉から「本質論など悪魔に喰われてしまえ！」と猛烈に批判される。

「俺」にとつて、自分の〈心〉を取り替えなければ、「現実と自分との間を、寒天質の視力を屈折させるものが隔てて」、「直接そのものに触れ感ることが出来」ず、いつまでも〈一身両口〉という苦境から逃れられない苦境を強いられる。さりとて、取り替えようとしたら、また〈ほんもの〉の〈自我〉から抵抗される。主人公は、まさにこういったジレンマに陥り、苦悩しつつ、「我が身を噛み」あうのである。

#### 四

「かめれおん日記」の結末のところに、「俺」の寂寥たる心象風景が描かれている。場所は中島敦がよく散策していた横浜外人墓地と思われるところである。

去年の丁度今頃、矢張霧のかゝつた朝、この同じ場所に座つて町や港を見下ろしたことがあつた。私は今それを思ひだした。それが何だか二三日前のことのやうな気がした。といふより、今も其の時から繼いで同じ風景を眺めてゐるやうな變な気がした。私の心に時々浮かんでくる想像——生の終りに臨んで必ず感じるであらう：自分の一生の時の短かさ果敢なさの感じ（本當に肉體的な、その感覺を直接に想像して見る癖が、私にはある——）が、又ふつと心を掠めた。一年前が現在とまるで區別できないやうに思はれる今の感じが、死ぬときのそれに似たものではないかと思はれたからである。

これは、「狼疾記」の「一體私達の魂は不滅なものですか？それとも、肉體と共に滅びて了ふものですか？」、「自分も世俗の人々と同じく、其の瞬間までは、無我夢中で、大きなものの中に於ける自分の位置などは全然悟らずに、あくせくと世事に心を煩はして過し、（いや、その途中で、一度二度位は、雑鬧の中で立ち止つて思索する男の



やうに、ひよいと自分の真の位置に氣付くこともあるかもしれない。)さて其の最後の瞬間に至つて、始めハツとするのだらう。」という表現と同質の問題であり、生命として最も現実的で且つ深刻な問題を提起しているのである。

続いて、中島敦はまたエウリピデスの作品の一節を引用し、世俗的な立場から主人公の非現実的な精神性を否定しつつ教示する。

人間の生活といふものは、苦しみ一杯でございます。その不幸には休みといふものがございません。しかし、若し人間のこの生活よりもつと快いものが假りにあるとしても、闇がそれを取囲み、我々の眼から隠して了つてゐます。それに此の地上の存在といふものは燦かしいやうに見えますので、私共は狂人のやうにそれに執着するでございます。何故と申しまして、私共は他の生活を存じませんし、地下で行はれてゐることに就いては何も知る所がございませんから。

この一節は、『列子』の「生不知死、死不知生、来不知去、去不知来。」という論と通底している。ただ『列子』の知に対して、「形式を超えた事柄については何も解らないやうに」、また「超自然とか、さうしたものの存在が、(また、非存在が)理論的に証明できない」(『狼疾記』) ように造られた人間にとって、永遠に愚の中で生きるしかない運命を背負い続けざるを得ないのである。

要するに、「俺」における(一身両口)の現象の提起は、中島敦の喘息体質や心臓機能の衰微および内臓諸器官の不調などによる、生に対しての生理的な反応とそれへの文学的描出と思われるし、作者の観念的、価値論的、東西文化的な矛盾の一流露とも考えられる。この(一身両口)という表象はまた、肉体自身、肉体と精神、近代と近代、東洋精神と西洋文明、自我と他者、個と全体など、さまざまなパリエーションに変奏でき、さまざまな実在に解釈・還元できるとも考えられる。しかし、以上で考察したように、「かめれおん日記」にある少なからざる道家思想の投影と中島敦文学の隠れた主題からすれば、それらよりも、生命存在の本質、すなわち道家論理で唱えている不老不死への追求とそれへの不能こそが、(一身両口)の現象を文学に訴えさせた真の原因であつたと言えるかもしれない。「かめれおん日記」とは、そういった中国思想の上に成り立っているものである。

注(1) 佐々木充著『中島敦の文学』(昭和四十八年六月、桜楓社刊)参照。  
なお、この論は中島敦(一身両口)現象に関する最も代表的な論と思われ。

(2) 向世陵編『中国哲学智恵』(2008年10月、中国人民大学出版社)参照。  
なお、「陰陽五行説」の濫觴については諸説があるが、一般的には、殷周に由来し春秋戦国時代に百家争鳴とともにその開花期を迎えたとされる。しかし、新資料が発見されるにつれ、「陰陽五行」は、「前史文明」から伝承されてきたものという新釈もあるが、なお未確定である。

(3) この論に関して、さまざまな解釈があり一致しない。中国哲学の中では老子ほど難解な論理はないと言われるほど、従来老子の『道德経』に対する解釈はまちまちで、百人の読者なら百種類の解釈ができると言われている。なお、文中における関係の記述も筆者の理解に基づいて

たものである。

(4) (注2)に同じ。

(5) 王懷興等編『中国文化簡史』(2001年10月、齊魯書社出版) 参照。

(6) 王濤等編『中国成語大辞典』(1987年8月、上海辞書出版社)。

(7) (一身両口) 現象は、「斗南先生」においてはじめて提起され、その後「かめれおん日記」を通じて「狼疾記」に至って明晰化してくる。

(8) (自我)と(超自我)は、筆者が中島敦の(一身両口)に基づいて定義したもので、(自我)とは、(先天性)を含む本当の自分を意味し、(超自我)とは、後天的に形成したものであり、その(自我)と相対する外在ものすべてを指すものである。

(9) 郡司勝義編『年譜』(『中島敦全集・第三卷』昭和五十一年九月、筑摩書房)

(10) 注(1)に同じ。佐々木充氏は、中島敦文学と『列子』との関係について、次のように論じる。「名人伝」は『列子』のリテールされたものではない。「名人伝」の基材は、『列子』のどの部分であつてもいいのではなく、正確にこれらの話でなければならなかつたし、その話も分割されて原型そのままではなく、作者の要求に添つて姿を変えられていたからである。」と論じ、また中島敦が「名人伝」の創作にあつたつて、『列子』は限々まで目を通していることが確実である」と、そして「彼の作品のモチーフは外から素材に盛り込んだものではなく、素材が本来的にはらんでいるものが、中島の魂と対応した時、中島のモチーフとして結晶する」ものだと指摘する。

(11) 鷺只雄氏著『中島敦論—「狼疾」の方法』(平成二年五月、有精堂)。

#### 【付記】

本稿は、日本学術振興会の外国人特別研究員フェローシップによる研究成果の一部であり、指導教官久保田啓一先生のご指導のもとに完成したものである。併せて、心より御礼申し上げます。

(そん・じゅりん、日本学術振興会外国人特別研究員・

広島大学外国人客員研究員)